

機関番号：12401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520035

研究課題名（和文） 古代より中世に至る日中古地理書の比較思想史的研究

研究課題名（英文） Ideological Studies on the old geographical descriptions of JAPAN-CHINA.

研究代表者

薄井 俊二 (USUI SHUNJI)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：90185009

研究成果の概要（和文）：本研究は、地理書を通して日本と中国の思想の交流や影響関係を調べたものであるが、その中で特に、山岳地誌に着目した。その結果次の点が明らかになった。山岳宗教施設の立地について見れば、中国では山中にある宗教性の強い小規模施設と、山麓にある聖俗の境目である大規模施設の二つのタイプがあった。これは日本でも同様であるが、中国から帰国した僧侶たちがこの考え方を持ち帰った可能性が伺えた。

研究成果の概要（英文）：

The main object of this project is to study the cultural exchange between Japan and China on geographical descriptions. Above all, we took up the problem on the mountain descriptions. On the location of the religious institutions, in China, there are two types of institutions. The first type is small scale holy institutions in the depth of the mountains. The second type is the large scale institutions that formed border between holy area and common area at the foot of mountains. Japan is in a similar situation. And there is some possibility that Japanese Buddhist priests brought the way of thinking back to Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：中国哲学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：地理書、山岳地誌、中国歴史地理、風土記、国文学、中国哲学

## 1. 研究開始当初の背景

中国の古代から中世の時代は、統一世界を作り上げた「漢王朝が崩壊」し、来るべき統一世界である「唐王朝が成立」するまでの、

世界再構築の模索期であったといえる。その中で、従来の価値観の動揺や新しい思想的試みなどが相次いで見られた。「中央集権から、

地方・地域の自立や独立」、「都市中心の生活から、田舎や山川自然の価値の発見」、「儒教一尊から、新しい教学である仏教・道教の登場と発展」などである。

こうした、世界像の再構築の試みは、地理的な世界把握を行う地理書の編纂においても同様の様相を示している。即ち、地域の独自性や価値を評価する「地域誌や地方名人伝」、山川を記述の対象とする「山川誌や山岳遊記」等が登場してくる。しかも、その多くには、新しい知識人である「仏者」や「道士」が関わっていたのである。

一方同じ頃の日本列島は、国家の形成期にあっていた。その中で「日本書紀」等の国史編纂と平行し、「風土記」などの地方の地誌・地域誌の編纂も広く行われた。この事業の立案・実行に、中国の地理書や地理思想が手本とされたことは大いに予想されるところである。また、遣唐使などとともに多くの仏者が中国へ渡ったが、帰国後の彼らは、山岳寺院の建立や山岳寺院誌の執筆に手を染めるようになる。ここにも中国における地理思想の動向の影響が見て取れるであろう。

このように、日中両国における世界像の構築・世界把握の試みは、それぞれの国における歴史的展開が背景にあることはもちろんだが、双方の影響関係が認められることも大いに予想されることである。

このことを解明するためには、日本と中国の双方の専門家が参加した共同研究を行わなければならないわけだが、これまで「地理思想」を主題とした、日本学と中国学の研究者の連携は必ずしも十分とは言えなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、古代から中世に至る期間に、日本と中国の双方で盛んに行われた、地理書編纂の諸相を比較検討し、日本と中国における地理的な世界把握の様相と、その交流の有様

について、明らかにしようとするものである。

主に薄井を中心として蓄積してきた中国地理書の研究と、飯泉を中心として蓄積してきた日本地理書の研究とを重ね合わせながら、そこに中国中世史を専門とする小林、日中書道文化史を専門とする大橋、広く地理学・地誌学を専門とする田村の三者の知見を加えながら、研究対象に多角的なアプローチを試みようとするものであった。

より具体的には次の研究課題をあげた。

- (1) 中国の地理書の基礎研究：地理書の採集と整理
- (2) 中国の地理書の思想史的検討：総合的な地誌から地域史的地理書が登場する思想的背景の解明
- (3) 中国の山岳地誌の検討：山岳地誌が登場してくる思想的背景の解明、とりわけ仏教・道教の動きとの関連で
- (4) 中国地理書の日本伝来の様相の検討：日本にもたらされた中国の地理書の有り様の復元
- (5) 日本の地理書の検討：風土記を中心とする日本の地理書の解読と、そこに見られる中国思想の影響の解明
- (6) 日本仏教における山岳寺院・山岳寺院誌の検討：日本の仏者による山岳寺院の建立や山岳寺院誌の編纂の実態の解明、及びそこに見られる中国の宗教活動の影響の解明

## 3. 研究の方法

本研究を遂行するための研究体制は、全体を統括するものとして「研究推進部会」を組織し、(1)～(6)の研究テーマごとの進捗状況を把握しつつ、各テーマ間の課題解決の検討を行った。

\* 下記の◎はテーマの推進責任者

●研究推進部会〈研究計画の推進状況把握・課題対応〉

構成：薄井俊二（総括）、飯泉健司、大橋

修一、小林聡、田村均

(1) 中国の地理書の基礎研究〈地理書の採集と整理〉

担当：薄井俊二、大橋修一、◎小林聡

(2) 中国の地理書の思想史的検討〈総合的な地誌から地域史的地理書が登場する思想的背景の解明〉

担当：薄井俊二、大橋修一、小林聡、◎田村均

(3) 中国の山岳地誌の検討〈山岳地誌が登場してくる思想的背景の解明、とりわけ仏教・道教の動きとの関連〉

担当：◎薄井俊二、大橋修一、小林聡

(4) 中国地理書の日本伝来の様相の検討〈日本にもたらされた中国の地理書の有り様の復元〉

担当：薄井俊二、飯泉健司、◎大橋修一、小林聡

(5) 日本の地理書の検討〈風土記を中心とする日本の地理書の解読と、そこに見られる中国思想の影響の解明〉

担当：◎飯泉健司、田村均

(6) 日本仏教における山岳寺院・山岳寺院誌の検討〈日本の仏者による山岳寺院の建立や山岳寺院誌の編纂の実態の解明、及びそこに見られる中国の宗教活動の影響の解明〉

担当：◎薄井俊二、飯泉健司、大橋修一

#### 4. 研究成果

(1) 中国の地理書の基礎研究

(2) 中国の地理書の思想史的検討

(3) 中国の山岳地誌の検討

・中国の地理書については、主として山岳を対象とするものを扱ったため、A～Cをまとめて記す。

①中国の山岳宗教を調査するため、薄井は2008～2010年の間、3回中国へ渡り、現地調査と資料蒐集にあたった。その成果の一部を、下記5〔雑誌論文〕5・7で公刊した。

②薄井は、中国の天台山について記した山岳地誌である「天台山記」について、書誌学的な検討を加え、かつその全文を翻刻し、詳細な訳注を施したものを作成した。その成果を、下記5〔学会発表〕1として発表し、〔雑誌論文〕15・21、〔図書〕1として公刊した。

これらの中で、山岳に設けられる寺院道観には、山中にある宗教性の強い小規模施設と、山麓にある聖俗をつなぐ大規模施設という二つのタイプがあることを明らかにした。

また、同一の山岳内において、道教と仏教という異なる宗教が、時として共存したり、融合したりしていることも明らかになった。つまり山岳信仰と言った宗教教団の末端にあつては、同一の山岳を神聖視するという共通の意識が強くなり、教団間の敷居が低くなっていたのではないかと考えられるのである。

③天台山に関わる資料として、六朝期と初唐期の詩文を検討し、その成果の一部を、下記5〔雑誌論文〕2・6・13・14として公刊した。そこでは、文学作品では、六朝時代までの天台山は、模糊とした神山であったのが、初唐期の道士司馬承禎の天台山入山を契機として、道教の聖地としての具体的なイメージを伴うものに変化していったことを明らかにした。

④如上の諸研究により、中国における山岳宗教と山岳地誌編纂の関連が明らかになりつつある。

(4) 中国地理書の日本伝来の様相の検討

・中国地理書の日本伝来の様相については、とりわけ藤原佐世の「日本国見在書目録」に着目し、この資料に掲載されている地理書を中心に伝来の様相を検討した。その成果の一部を、下記5〔雑誌論文〕22で公刊した。

(5) 日本の地理書の検討

・日本の地理書については、とりわけ「風土記」に着目し、その地理書としての性格や文芸史的な位置づけを検討した。その成果の一部を、下記5〔雑誌論文〕1・8・16で公刊した。

(6) 日本仏教における山岳寺院・山岳寺院誌の検討

①日本における山岳寺院・寺院誌の検討は、いまだ途中である。薄井は、この間、京都比叡山・和歌山高野山・福岡英彦山などに出張し、実地調査と資料蒐集を行ってきた。

②その成果はまだ刊行には至っていないが、見通しを述べておけば、上記の(3)で見た、中国における山岳施設の有り様や、異なる宗教観の隣接関係が、日本にも見られるのではないか、ということである。

施設に立地については、中国と同様、山中には宗教性の強い小規模施設が、山麓には聖俗の境目となる大規模施設が多く見られた。しかも、山麓の施設は、円仁や円珍と言った唐から帰国した僧侶たちの手になるものが多い。ここから、日本における二種類の施設の有り様は、入唐僧が中国で実見したものを、日本に持ち帰ったものではないか、と推測される。

二つの宗教の習合については、むしろ日本におけるそれの方が研究が進んでいる。つまり、仏教と神道といった異なった信仰・宗教思想が、同じ場所を聖地視する中で習合していた。このことと、中国における、山岳における仏教と道教との敷居の低さにも、共通するものが見られると言えよう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 23 件)

1. 飯泉健司「文芸史と風土」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第60巻第1号、

縦39-46頁、2011年

2. 薄井俊二「天台山の詩歌(其四)」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第60巻第1号、縦11-37頁、2011年

3. 大橋修一「秦の『八体』」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第60巻第1号、149-154頁、2011年

4. 田村均「近代移行期における高機の改良とその普及」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第60巻第1号、107-117頁、2011年

5. 薄井俊二「中国の山岳と宗教見聞記(その3)——南岳衡山・茅山——」、『埼玉大学国語教育論叢』査読あり、第13号、45-67頁、2010年

6. 薄井俊二「天台山の詩歌(其三)」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第59巻第2号、1-24頁、2010年

7. 薄井俊二「中国の山岳と宗教見聞記(その2)——五台山・王屋山——」、『埼玉大学国語教育論叢』査読あり、第12号、29-45頁、2010年

8. 飯泉健司「播磨の風土——秋・冬・春祭りにみる地力の復活」、『かぎろひ』査読なし、第2号、19-27頁、2010年

9. 小林聡「在中国古代礼制、服制史上河西出土文物的特点」、『高台魏晋墓与河西历史文化国際学術研究会論文集』査読なし、高台県委・県政府、甘肅省敦煌学会・敦煌研究院文献所刊、187-194頁、2010年

10. 小林聡「北朝時代における公的服飾制度の諸相——朝服制度を中心に」、『大正大学東洋史論集』査読なし、第3号、25-56頁、2010年

11. 小林聡「朝服制度の行方——曹魏～五胡東晋時代における出土文物を中心として」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第59巻第1号、69-84頁、2010年

12. 田村均「木綿の東方伝播と唐棧模倣——近世日本の経験、模倣から創造へ」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第59巻1号、197-210頁、2010年

13. 薄井俊二「天台山の詩歌(其二)」、『埼玉大学紀要(教育学部)』査読なし、第58巻第2号、1-22頁、2009年

14. 薄井俊二「天台山の詩歌(其一)——六朝以前(上)」、『埼玉大学紀要(教育学部)』

- 査読なし、第 58 巻第 1 号、1-11 頁、2009 年
15. 薄井俊二「中国の山岳地誌——『天台山記』をめぐって」『東方』査読なし、第 340 号、2-5 頁、2009 年
16. 飯泉健司「靈剣の主張——播磨国風土記讃容郡仲川里条の表現性」、『風土記の表現』査読あり、232-247 頁、2009 年
17. 大橋修一「江戸文化末期における書文化考」『大東書道』査読なし、第 17 号、37-44 頁、2009 年
18. 小林聡「河西地区出土文物における朝服着用事例に関する一考察」、『西北出土文献研究』2008 年度特刊、査読なし、53-61 頁、2009 年
19. 小林聡「漢唐間の礼制と公的服飾制度に関する研究序説」、『埼玉大学紀要 教育学部』査読なし、第 58 巻第 2 号 233-244 頁、2009 年
20. 田村均「近代日本における厚地綿布の品質と価格」、『埼玉大学紀要 教育学部』査読なし、第 58 巻 2 号、261-270 頁、2009 年
21. 薄井俊二「『天台山記』本文研究（後編）」『平成 17～19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書 日本と中国の地理書の比較思想史的研究』査読なし、6-125 頁、2008 年
22. 薄井俊二「日本国見在書目録所収の地理書について（その 2）」『風土記研究』査読あり、第 32 号、24-61 頁、2008 年
23. 大橋修一「鍾繇書の実相」『漢字文化研究』査読なし、第 5 号、2-7 頁、2008 年

〔学会発表〕（計 1 件）

1. 薄井俊二、「山中寺観と山麓寺観～唐代の天台山を中心に～」、日本中国学会第 60 回大会、2008 年 10 月 11 日、京都大学

〔図書〕（計 1 件）

1. 薄井俊二、中国書店、『天台山記の研究』、2011 年、512 頁

〔産業財産権〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

薄井 俊二 (USUI SHUNJI)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：90185009

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

飯泉 健司 (IIIZUMI KENJI)  
埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70277747

大橋 修一 (OHASHI SHUICHI)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：70302502

小林 聡 (KOBAYASHI SATOSHI)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：40234819

田村 均 (TAMURA HITOSHI)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：40201628